

# ～中世北条荘の仏教を語る石幢～ 嘉慶三年石造六面幢

県指定有形文化財（建造物）

市内三間通の桜木町三区北部にある諏訪神社の境内に「嘉慶三年石造六面幢」と呼ばれる石幢が建っています。大きさは高さ 1.2m、一面の幅 36cm、下から幢身・中台・龕部の 3 つの部分から成り、凝灰石の一岩で造られ、笠は別に作って乗せてあります。覆屋がなければ、素朴で力強い堂々たる石幢であることが感じとれるはずです。元は同地域の石法花・六角にあり、そこから現在の場所に移転されました。

石幢とは石塔の一種です。六角形の幢身を有する六面幢、幢身面ごとに地蔵を彫りこんだ六地藏塔などがあります。

阿弥陀如来や地蔵菩薩への信仰が広がった鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて、石塔・石幢・板碑等、仏教系の石造物が多く造られました。

中世・鎌倉時代の南陽市域は「北条荘」と言われ、鎌倉御家人の大江氏一族の長井氏が支配地頭でした。しかし、鎌倉幕府は滅び、南北朝の時代（1334～1392 年）に入ると地頭以下の武士層も南北朝争乱の渦に巻き込まれ、この時期の仏教系石造物にも南朝系年号と北朝系年号が入り乱れて使われています。嘉慶 3（1389）年は北朝年号で、この六面幢を建てた人物（おそらく 藤田在家の主）は北朝方であったことが分かります。

また、この六面幢の幢身の正面には、仏を表す文字「種子」が複数結合した結合種子（未解読）があり、さらに正面から左に回って、イ（地蔵）、キリーク（弥陀）、バク（釈迦）、バイ（薬師）、カ（地蔵）の種子が薬研彫り（断面をV字型に彫ること）されています。龕部にある長方形の彫り込みには別に作った小六地藏を安置したとも考えられます。

中世置賜のほとんどの集落は在家村落です。地蔵石仏、六地藏石仏、六地藏塔、六面幢は、無仏の世界である集落外との境に建立されています。村のはずれのお地藏さんなのです。



嘉慶三年石造六面幢

さて、中世南北朝時代の桜木町三区には藤田在家があり、ここを起点に北外れに諏訪神社が、300m ほど南外れに石法花が位置します。石法花は、市内郡山を経て赤湯から小松（川西町）に至る古道と、川端在家から市内長岡堰沿いに藤田在家を経て長岡・俎柳方面へ至る古道の交差点にあたります。今でもこの周辺に石法花や六角の地名が残るのはそのためなのです。

嘉慶 3 年の石造六面幢は、数 100 年間、道行く人の安全と幸せを守ってきました。現在は県指定有形文化財として各地に紹介され、100 歳を超えても活躍された日本を代表する考古学者の故齋藤忠博士も度々訪れています。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄

平成 26 年 5 月 1 日号 市報なんよう掲載